共晶

第　28　号

共晶会創立70周年記念特別号

2012年・6月

名古屋大学共晶会

親子二代にわたっての共晶会
ーもう一つのSTEM教育ー

兼松　秀行（昭和56年卒）

私は生まれも育ちも大阪堺で、3年ほど父の仕事の都合で栃木県にくらしたことはあるものの、ふるさとといえば大阪、堺です。根っからの浪速っ子の私が、名古屋大学、しかも共晶会と関わるようになったのは、父親の影響であることはまちがいありません。

私の父親は昭和26年名古屋帝国大学工学部金属学科を卒業いたしました。もともと岐阜県加茂郡坂祝町の出身であった父は、恩師の久恒先生の”命令”で、堺の”高田アルミニウム”にいやいや就職したのでした。当時の久恒研のスタッフは助教授の西先生と助手の上田先生だったと聞いています。先生方には大変お世話になったようです。父のリードしていた兼松家の食卓のヒーローは、湯川秀樹博士でも、朝永振一郎博士でもなく、久恒先生、西先生、上田先生でありました。時には、同じく教授であらせられた武田先生、関口先生、沢本先生、佐野先生、また気鋭の助教授であられた井上先生、坂尾先生、また父と下宿をともにしたことのある同期の岡嶋先生のお話も承りました。これらの先生方の武勇伝、当時の名大金属学科の雰囲気など、それは多分に父が青春時代を過ごした戦争を挟んだ前後のあの激動の時代に特有のものであったとは思いますが、少年の心に遠い町へのあこがれ、旅立ちへの誘いが芽生えていったのは自然なことであったように思います。少年少女時代に芽生えたあこがれは、必ず心のどこかに根を下ろし、後々何らかの形になって、人生の折々に影響を与えるものではないでしょうか。こうして私は名古屋大学を、しかも金属・鉄鋼工学科を志望したのでありました。

父に”名大を受けるよ”、と話したときのことを昨日のように思い出します。仕事から戻って庭に水をまいていた父は、不機嫌そうに”名大なんかやめとけよ”、といったのでした。”金属をうけるよ”と重ねていう私に”金属なんかやめて機械にしろよ”ととりつくしまもなかったのですが、きっと父は照れていたのだろうと思います。内心うれしかったに違いありません。受験直前の元旦に、私は父と新幹線に乗って名大金属学科に見学に行ったのでした。私たちが見た工学部5号館は、父の学んだ建物とはすっかり違っていました。鍵が開いていましたので、勝手に建物に入って見て回ったのですが、久恒先生は既に御退官になっておられまして、名前はどこにもありませんでした。しかし、西先生、上田先生、坂尾先生、岡嶋先生など、幼い頃から聞き親しんだ先生方のお名前に、気合いが入ったのをとてもよく覚えています。

その数週間後、私は受験したのでした。幸い合格して、”黙っているわけにはいかんぞ”と父が恩師の先生方にご挨拶に伺ったのですが、当時西先生が工学部長でいらっしゃって、なんと私の合格をすでにご存知でいらっしゃいました。父から聞いたのですが、”おめでとう”と父の顔を見るなり、西先生がおっしゃったそうです。その春にちょうど父は高田アルミから会社名を変えていた昭和アルミニウム株式会社の取締役に昇進していましたので、自分の昇進のことを祝っていただいたと思ったらしいのですが、実はそうではなく、私の

ことをおっしゃっていたのでした。どうやら私は大変いい成績で合格できたらしく、それを西先生が喜んでくださっていたのでした。それもこれも、とても強い動機が私にあったからだと思います。幼い頃からのあこがれの大学、あこがれの学科でしたから。

こうして合格してからも大学での講義はとても楽しく、次々と現れる先生方の話をわくわくしながら熱心に聞いていた自分を思い出します。同級生のみんなは、どうして兼松がそんなに熱心に勉強するのかときっと思ったに違いありません。勉強ばかりして嫌なやつだとか、変なやつだと思ったことでしょう。さして熱心に勉強した記憶のない高校時代を過ごした私自身が、自分自身の高いモティベーションが大学生活において持続されるのがとても不思議でした。そんな変わった熱狂の中での学生生活であったと記憶しています。

入学してから 35 年近くが経過した今、私は産業人材育成をライフワークとする国立高等専門学校の教師となっています。希望に満ちた若者を工学の分野に導き、30 年先において活躍できる人材へと鍛錬し、産業界へと送り出すこと、これが毎日取り組んでいる課題です。様々な教育手法を提案し、実践したりしております。昨年共晶会でお話をさせていただいた STEM 教育もその一つです。こうした教育研究を私は大まじめでやっています。自発的に、能動的に”学び”に若者を取り組ませるためにはどうしたらいいのか、これを真剣に考えないと将来の日本の産業界が危うい！と心底危惧しているのですが、自らを振り返ると、それよりもなによりも、”志”を若者にもたせることが一番重要なのではないか、それこそが本当の STEM 教育なのではないだろうか、実はそう思っています。私にとって、その”志”を大学時代から失うことなく、今日に至っているのは、親子二代で歩んだ共晶会での 60 年ほどの歳月のゆえではなかったか。つくづくそう思う今日この頃です。共晶会の 70 周年を、深い感謝と万感の思いを込めて心からお祝い申し上げたいと存じます。

変化の中で生きている

鈴木　比呂輝（昭和 56 年卒）

共晶会創立 70 周年おめでとうございます。歴代会長・副会長を初め、理事、幹事、会計など役員の皆様、ありがとうございました。今後益々の、卒業生・修了生皆様の相互交流の活性化ならびに本学材料教室の益々の発展を望んで止みません。

さて、「思い出のページ」の章と言う事で、久しぶりに学生時代の記憶を回顧する機会を頂きました。10 年一昔と言われますが 30 年となるとまるで別世界です。卒業当時に思いを馳せると、近年の特に電子業界の凄まじい技術革新に驚くばかりです。私たちの先輩や同窓生、後輩たちも大いにこの革新の先頭に立ったり、また基礎技術、素材開発などでご活躍の事と思います。

当時コンピューターはまだまだ個人レベルでは普及していなく、そのほとんどがベーシ